

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成24年5月1日(第1216号)

発行／(社)秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306



絵／文 白澤恵舟

一月の誕生祝いに、主人からたくさんの薔薇の花をもらった。
この頃は、花卉の世界にも季節感が乏しくなったが、
なににせよ、八十歳を過ぎてでも忘れずに贈ってくれる気持ちに深く感謝です。

理事会・協議員会、関係団体総会を開催

一般社団法人 秋田県建設業協会（村岡淑郎会長）、秋田県土木施工管理技士会（北林一成会長）、秋田県建設事業協同組合連合会（菅原三朗会長）、建設業労働災害防止協会秋田県支部（菅原三朗支部長）の4団体は、4月27日に秋田キャッスルホテルを会場に理事会・各総会を開催し、23年度決算及び事業報告、24年度予算（案）及び事業計画の報告・審議を行った。

秋田県建設業協会の理事会・協議員会では監事の補欠選任として東日本建設業保証株式会社の勝又義人秋田支店長の選任が審議され承認。また、秋田県建設事業協同組合連合会では任期満了に伴う役員改選により、村岡淑郎新会長が就任することとなった。

一般社団法人 秋田県建設業協会
理事会・協議員会

第1号議案 一般社団法人への認可及び

移行の登記完了報告の件

第2号議案 定時総会召集の件

第3号議案 平成23年度事業報告及び同報告付属明細書承認の件

第4号議案 貸借対照表及び正味財産増減計算書及びこれらの付属明細書承認の件

第5号議案 平成24年度会費基準（案）審議の件

第6号議案 平成24年度事業計画並びに収支予算（案）審議の件

第7号議案 監事の補欠選任（案）審議の件

秋田県土木施工管理技士会

第20回代議員会（通常総会）

議案第1号 平成23年度事業報告並びに収支決算承認の件

議案第2号 平成24年度事業計画並びに収支予算（案）審議の件

議案第3号 規約及び運営委員会規程改



正（案）審議の件

秋田県建設事業協同組合連合会
第50回通常総会

議案第1号 平成23年度事業報告、財産目録、貸借対照表及び損益計算書に承認を求める件

議案第2号 平成23年度剰余金処分（案）に承認を求める件

議案第3号 借入金の最高限度額を定める（案）に承認を求める件

協会

職員人事のお知らせ

山本支部

〔退職〕 嘱託職員

見上貞克（3月31日付）

〔採用〕 事務局長

土崎銃悦（4月2日付）

秋田支部

〔退職〕 事務局長

鈴木一男（3月31日付）

〔採用〕 事務局長

伊藤雅樹（4月2日付）

仙北支部

〔任命〕 事務局長代行

→事務局長

北小路聡（4月2日付）

（財）建設業福祉共済団から

建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

協会・建災防

新規学卒者研修会を開催

『建設業界と社会人としての心構えについて』新入社員の基本と建設業の基礎知識を学習

県協会では、平成24年度新規学卒入職者（新入社員）研修会を4月27日秋田ビューホテルにおいて開催した。

研修会には、この春会員企業に採用された新入社員49人が参加。

初めに村岡会長が講話を行い、「秋田県の建設業界を取り巻く現状は公共事業費の削減、長期にわたる景気の低迷によりそのシワ寄せが建設労働者や技能者の賃金に及んでいる。さらに建設業就業者数の減少と高齢化、若年労働者の就業割合の減少、入職後三年以内の離職率が高いなど、大変厳しい状況になっている。しかし昨年3月に発生した巨大地震・津波において現地いち早く駆けつけ災害復旧のため自衛隊と共に必死にがれき処理にあたった我々建設業者の姿に『自分たちも危ないのにこんなにも頑張ってくれて本当に感謝している』という地元の方々から多くの感謝の言葉があり、世間の目が建設業は“きつい”“汚い”“危険”の『3K』か

ら、“希望の持てる産業”、“気概が起きる産業”、“期待される産業”の『3K』だと一変した。建設業は、ただ橋や道路等の公共事業を受注するだけでなく、災害が起こった時のライフラインの確保や復旧活動等、常に地域の安全・安心を守る業界として欠かすことのできない産業である。秋田県のこれからの建設業は、自分が背負っていくんだというぐらゐの気概をもって前に進んでほしい。皆さんはこの4月に人生を送るうえで最も大事な生活基盤となる“就職”を成し遂げた。働くことは難儀なこと、仕事で楽なことはひとつもない。簡単に離職を考えず先輩や同僚とよくコミュニケーションを取りながら根気強くコツコツと一生懸命働いてください。また皆さんは、会社から必要とされて採用されたことを忘れず誇りを持って頑張ってください」と述べた。

続く研修会では（株）日本コンサルタントグループの酒井誠一氏を講師に迎

秋田水風景

文と写真/加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴/旅の手帖、WoodyLife、ペンチャー・リンク、郷、あるる他
海外取材歴/ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写楽 主宰/写真教室、撮影ツアー企画等

Vol.33

秋田マリーナ

【あきたまりーな】

秋田市飯島堀川



- 議案第4号 会員に対する事業貸付金の限度額を定める(案)に承認を求める件
- 議案第5号 役員報酬(案)審議の件
- 議案第6号 平成24年度事業計画並びに収支予算(案)審議の件
- 議案第7号 任期満了に伴う役員改選の件

建設業労働災害防止協会秋田県支部

第49回代議員会(通常総会)

- 議案第1号 平成23年度事業報告、収支予算・決算比較表、財産目録、貸借対照表及び損益計算書承認の件
- 議案第2号 平成23年度剰余金処分(案)承認の件
- 議案第3号 平成24年度事業計画並びに収支予算(案)審議の件
- 議案第4号 支部規約の改正(案)承認の件
- 議案第5号 任期満了に伴う役員改選の件
- 議案第6号 顧問委嘱の件

え、社会人としての心構え、建設業界の基礎知識、新入社員の基本(身だしなみ、挨拶、敬語の使い方)について、午後からはグループに分かれ、建設業界の仕事の流れについて設計図や見積書、工程表の作成、安全管理、施工検査など与えられた役割についての責任と協力して仕事を組み立てていくことについてゲーム感覚で学んだ。



個人的な思いを述べさせていただけの筆者は、日本が原発への依存から脱却する方向を目指してもらえないものかと、願っている。

それを強く思ったのは、青森県で行われている原子燃料サイクルに引つかかるものを感じたからだ。こまかいことは割愛するし、筆者の認識に誤りがあるかもしれないが、いずれ、事業の一つは、原子力発電所で発生する低レベルの放射性廃棄物を300年間に渡って地中に埋設し管理するという説明であつたと思う。

300年経てばまったく無害なものになるという意味だと思ふのだが、筆者は、「人畜無害なものにするには300年もの時間を要するのか」と、驚いたのである。

300年後といえば、今生まれたばかりの子どもでも生きてはおらず、孫でもひ孫でもなく更にその2、3代先の時代だ。つまり、今生きている人たちが自分たちの生きている

うちには始末をつけられず、直接的な申し送りすら出来ない未来の人たちに「あととは任せだよ」と下駄を預けてしまっているようなものではないのか。

人のけじめとして、何か厄介なことがあつたら、自分の生きているうち、あるいはせめて、信頼のおける者にあとを託して、始末をつけるべきではないのだろうか。300年も先の子孫に厄介なものを押し付けるといのは、「祖先」としてなんだか申し訳ないような気持ちになってしまうのだ。

風力発電にしても太陽光発電にしても地熱発電にしても、いいことづくめというものではないだろうが、まずは原発との訣別というわけにはいかないものだろうか。ドイツではなぜそれが出来たのか、知りたいところである。

秋田県は風力発電の好適地なのだそう、これからも風車のある風景は増えていくことだろう。せめて秋田には、日本のクリーンエネルギーの先進地になってほしいものだ。

爆弾低気圧と風台風

永井登志樹

先月上旬の“暴風”は凄まじかった。

その日は提出期限が迫った仕事を夜半過ぎまでしていたら、停電。しかたなく床についたが、築年数が半世紀近くになったボロ家が強風でギンギン音をたてて揺れ、恐怖感でなかなか寝つけなかった。

秋田県だけでなく、ほぼ日本列島全域に台風並みかそれ以上の強風や大しけをもたらしたこの嵐は、短時間で急速に発達する「爆弾低気圧」だった。

低気圧は寒気と暖気がせめぎ合い、交じり合うことで発達する。その時、寒気と暖気の温度差が激しいほど、大きなエネルギーとなる。そのなかで1日に24ヘクトパスカル以上下がるものは特に「爆弾低気圧」と呼ばれ、暴風や高波など激しい現象を引き起こす。今年は寒かった冬の寒気が強いまましぶとく残っており、そこに春の暖気が南から入るため、このような現象が起こりやすかったのだという。

ただ、「爆弾低気圧」ということばは通称、あるいは俗語で、正式な気象用語としては用いられていないようだ。だが、今回の低気圧は一日で38ヘクトパスカルも下がったというから、まさに強力な「爆弾」ということばが似つかわしい。

過去の事例としては、昭和29年(1954年)5月に日本海で猛発達した低気圧の影響で漁船が多数遭難し、約670人が死亡・行方不明となったのも、「爆弾低気圧」によるものだったという。私は台風ではなく低気圧によって、過去にこれほどの大量遭難があったことを、今回の関連ニュースで初めて知った。この遭難事故をきっかけに、4月下旬から5月ごろにかけ、強風や落雷をもたらす低気圧を「メイスーム(5月の嵐)」と呼ぶようになったともいわれる。

昭和29年の遭難事例でもわかるように、「爆弾低気圧」は風だけでなく波の破壊力も凄まじい。今回も男鹿半島の南海岸から西海岸にかけて、いたるところでその爪跡が見られた。10メートルもの高波が堤防や波食台を越えて押し寄せ、県道はところどころでアスファルト舗装がはがれ、決壊したところもあった。

加茂青砂や戸賀地区ではでは公衆トイレが損壊し、観光シーズンを前に使えない状態になったほか、男鹿水族館GAOは被害額が約1億4000万円に上ると発表された。船や定置網の損傷もひどく漁業関係はかなりの被害を被ったようだ。秋田県全体では、この「爆弾低気圧」による農林水産の被害は合わせて11億541万円に上るといふ(県災害対策本部/4月11日現在)。

わが家でもちょっとした被害があった。風で自宅の門が外れて愛車に当たり、フェンダーがへこんでしまった。まあ、農家や漁師さんたちに比べたら、これくらいのことで済んだのは、幸いだったといえようか。

今回の「爆弾低気圧」は、低気圧なので動きが遅く、長時間にわたって強風が吹き荒れたのが特徴だったが、風にこれほどの恐怖を覚えたのは、今からおおよそ20年前、平成3年(1991年)9月の台風19号以来のような気がする。

19号の破壊力も凄まじかった。広葉樹が一瞬にして塩風で枯れ、大木が根元から倒れた。特に名木、古木といった樹に被害が多かった。男鹿真山神社の杉、旧協和町唐松神社の杉、本荘市新山神社の杉、森吉山の桃洞杉、矢立峠の風景林、秋田市赤沼の三吉神社のひめこ松、手形大沢の扇の大松……数えあげたらきりが無いほど。先人が守ってきた美しい景観がすっかり変わったところもあった。

19号は別名「りんご台風」。収穫前のりんごが落ちて、青森県津軽のりんご農家は甚大な被害を被った。この台風のあと、たまたま温泉取材の仕事で津軽を旅し、折れたりんごの木の下に山のように積まれた落下りんごをいたるところで見た。この台風以降、風除けの防風ネットを設置する果樹園が増え、風対策の重要性が認識されるようになった。

風台風といえば、平成16年(2004年)8月の台風15号も記憶に新しい。この台風は秋田県沖を通過した際に凄まじい強風で海水を巻き上げ、沿岸部の樹木や水稲に吹き付けた。そのため塩分で葉や穂の水分が奪い取られ、枯れてしまい、それまでの緑の山々が一瞬にして紅葉を通り越して、初冬の風景に変わってしまった。

塩害、気象学的には潮風害(ちょうふうがい)と呼ばれる現象は、台風19号の時にも見られたが、15号はそれにも増してひどく、男鹿半島海岸部の水田の稲穂は白く変色して枯れ、ほぼ全滅状態であった。

その年(2004年)の秋田県の作況指数は86(県中央部は71)という著しい不良で全国最低値であった(平年作=100)。86の数値は全県の平均値で、沿岸部の由利地方や男鹿・南秋田郡などでは収穫皆無のところもあったようだ。

台風による人的・物的な被害はほとんどなかったのも、中央のマスコミなどでは報じられず、あまり話題にならなかったが、水稲の被害総額だけでも60億円にのぼったというから、15号は近年まれにみるたちの悪い台風だったことがわかる。

この台風が襲来してから1ヵ月ほどあとに、散歩の途中に近くの公園を通ったら桜が狂い咲きしていたのを見た。ほとんどの広葉樹は塩害で葉を落としてしまったのだが、根が養分を送ってもそれを受け取るはずの葉がないため、養分がつぼみに回り、花を咲かせたのか。それとも、落葉しても気温がまだ高いため、桜の木が「春になった」と勘違いして咲いてしまったのか。枯枝に花が咲くとはこのことかと目を疑ったものだった。

こうした人間の智が及ばない自然現象や脅威を前にすると、自然に対する畏怖の念さえわき起こってくる。



「爆弾低気圧」の高波により決壊した県道(男鹿市潮瀬崎)